



# 審査を終えて

第四十回展 大会審査部長

加藤 東陽

第四十回高田宮杯日本武道館書写道大展覧会は、全国各地から毛筆の部・硬筆の部合わせて二万四千二百二十四点の力作が寄せられ、盛大に実施することができました。皆様の熱意とご支援に、厚く御礼申し上げます。

審査は、六月二十三日（日）、日本武道館第一・第二小道場において、三十一名の審査委員によって行われました。

審査にあたっては、まず学習指導要領に準拠していることを基本方針として、殊に毛筆作品の語句については、それぞれの校種（教育課程）において発達段階を踏まえた語句（内容）であることが望ましいことや、一つの書きぶり（書風）や地域の偏りがないように配慮すること等を確認し、高田宮賞をはじめ、各賞を決定いたしました。受賞された皆様に、心からお祝い申し上げます。

次に、各部門の審査所感を述べます。

○幼児・小学校部門Ⅱ今年も全国から多種多様な出品があり、大変良い傾向でした。また、各学年ともに、「とめ・はね・払い」等の基本をしっかりとし身に付け、元気な声が聞こえてくるような作品が多くあり、嬉しく思いました。

○中学校部門Ⅱ大半が行書作品でしたが、字配りや字形等基礎力のしっかりした作品が多く見られました。特に、上位の学年において、練習を積んで、筆力の伴った質の高い作品が見られたことが心に残りました。

○高校部門Ⅱ漢字の臨書作品が多いのは例年どおりでしたが、今年も、いろいろな古典に取り組んでいる中で、その成果が、線質や余白美などに表れて、情趣豊かな作品も多くあり高い評価を得ました。来年は、仮名や漢字仮名交じりの書に取り組んだ作品が更に増えることを願っています。

○大学・一般部門Ⅱ前回に比べて、漢字・仮名・漢字仮名交じりの書等が偏りなく出品されていたことや、古典作品に裏打ちされた各々の特長（個性）を出した作品が多く見られました。今後も古典を背景に、個性を出した幅広い挑戦を期待いたします。

結びとなりますが、今年一月に開催された無形文化遺産保護条約関係者省庁連絡会議において、書道のユネスコ無形文化遺産への提案が決定しました。こうした状況を鑑みて、本展覧会が文字文化を大切にして、ますます充実発展して参りますよう、皆様の一層のご支援とご協力をお願いし、講評といたします。